

対馬市 アグリパークプロジェクト2年目の経過¹

研究員 高木 英彰

1. はじめに

当研究所は2014年より長崎県対馬市にて、市民・行政とともに食・エネルギー・ケアを一体としたまちづくりの実践的取組みを継続してきた。その中で、2017年度より同市の久田地区において、地域包括ケアシステムの構築の一環として遊休農地を活用した「アグリパークプロジェクト」の活動が始動した。その活動の内容はこれまでも当研究所機関誌²で報告してきている。今号では2年目の区切りを迎えたところでの成果と課題を報告する。

2. 背景

対馬市医療統括官兼いづはら診療所所長の桑原直行医師によれば、市内には、毎日の生活に楽しみや生きがいを感じられず、孤独感や不安感を抱えており、また、やることもないと感じている高齢者が多いとのことである。こうした生活環境では、身体の虚弱化や引きこもり、認知症の顕在化・重度化など、心身への悪影響が及ぶことが懸念される。孤独のない、健康な生活を送るには住民が積極的に外に出たくなる場、生きがいとなる場が地域に存在することが重要であると考えた。

3. 活動概要

久田地区では2015年に策定した地域づくり計画において、市民の憩い、交流、そして観光の場となる、公園の里づくりの推進を掲げている。その計画に基づき、2017年3月より遊休農地を活用した住民主体の「アグリパーク」活動を開始した。雑草・雑木の処理、耕起、播種・収穫、獣害防止柵の設置、竈の製作、水路整備等、出来るだけ参加者の手作りによって整備を進めたが、住民の力だけでは及ばない部分については地元企業、J A、森林組合などの支援を得ながら活動を行ってきた。

2年目となるアグリパークでは対州^{たいしゅう}そば、神事用の麦、きび（コウリヤン、タカキビ）などの従来対馬で栽培されてきた作物や、作り手の少なくなってきた作物を育ててきたほか、ガラビ（エビヅル）やシマサルナシ等、減少している自生植物の保存を目指して繁殖を試みている。他にもイモ、豆、タマネギ等一般的な作物も栽培している。今後はツリーハウスの建設が検討されており、子供たちや観光客も関われる場を目指している。

4. 2回目の収穫祭

昨年12月24日には、2回目となる収穫祭を

1 本稿は、対馬市が実施している域学連携事業の一環として開催された「対馬学フォーラム2018」において報告したポスター発表（菅野壮、高木英彰『アグリパークプロジェクト～農地を活用した健康地域づくり～』）の要旨をベースとしている。発表したポスターは、これまで当研究所とともに対馬市で活動した複数の大学生が制作したものであり、同フォーラムにおいて「これから研究・実践活動に取り組むもので、企画・計画に実現性があり、対馬への貢献を期待できるもの」として、50を超える報告の中で企画賞を受賞した。

2 共済総合研究別冊『平成29年度J A共済総研セミナー 超高齢社会における地域の対応と若者の還流による効果を求めて～対馬市における地域包括ケアと域学連携の取組みより～』2018年8月発行

写真1 コウリヤンの加工過程



写真4 アグリパーク収穫祭の食事会の様子



写真2 きびだんごづくりの様子



写真3 対州そばのそば打ち



久田自治公民館にて開催した。近隣を中心にチラシを配布し、今年は昨年を超える30名の一般来場者を迎えた。ここではアグリパークで収穫された対州そばを熟練者の指導を受けながらその場で打ち、来場者に振舞った。

それに加え、今年新しく試みたのは「きびだんごの再現」である。原料はコウリヤンであり、こちらもアグリパークにて栽培、収穫されたものである。コウリヤンもかつては対馬島内で栽培されていたものであるが、次第にコメに代替されるようになり、いまではかろうじて一部地区に種が残っている状態であった。したがってきびだんごの製粉工程も、ある80歳代の女性しか経験していないということであった。そこで収穫祭に先立ち、その女性から製粉工程を指導してもらい、収穫祭にて来場者で試食を行ったところ、来場者にとっては逆に馴染みのない食感のため感動をもって受け入れられたようであった。

コウリヤンが身近だった当時とは色、食味、成分等、嗜好が異なっていると考えられるため、加工過程や調理法の実験を重ねる価値があるのではないかと現地はコウリヤン栽培の継承に期待を高めている。

5. 効果

アグリパークにおける活動は、1年目の基盤整備期とは異なり、肉体的負荷が大きかったり危険であったりする作業が概ね完了し、体力がない人でも関われるメニューが中心となった。その結果、関心を持つ親世代が子供の遊び場の創出として連れて来られる場となってきた。

また、島外大学生の学び、地域との交流の場として、アグリパーク活動が強いインパクトを与えていることが明らかになっている。単にイベント的に行われる農作業が楽しいだけでなく、手作りで生活環境も異なる人々と共同作業を行い、地元の人々の生きる技術、知恵、思考から刺激を受けるようである。

さらに、アグリパークの活動を参考にして、別の地区からまさしく住民主体の「貝口ピアパーク」が立ち上がったことが2年目に起きた現象である。

6. 貝口ピアパーク

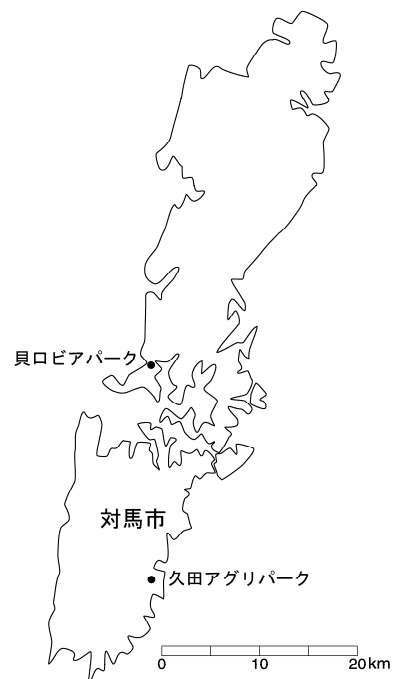
貝口ピアパークについて、活動をバックアップしている対馬市社会福祉協議会作成の資料に依りながら紹介しておこう。

貝口は対馬市の中央部、豊玉町の集落である。集落単独では18世帯30人（2018年12月末、住民基本台帳）という市内でも小さな地区である。人口が減り空き家と遊休農地が増加、そして一人暮らしの住民も増加しているという状況は他地区と変わらないが、小規模集落の反面であろうか、住民間のつながりが強く、月1回の懇親会が開かれてきたという。住民座談会でも「100歳まで生きる!」「元気な高齢者地域に!」との意見が上っており、明るく前向きな気風の漂う地区である。

貝口ピアパークの発端は、初年度よりアグリパーク活動を支援・参画していた社会福祉協議会が、拠点を置く豊玉町でも同様の取組

みを展開できないかと住民代表をアグリパークの会議に誘ったことによる。続けて、豊玉地区公民館に桑原医師を招き、アグリパークプロジェクトについての講演会を開いた。この講演を聴き「このような取り組みならできるかも」と感じた住民が活動を始めるに至った。月一回の懇親会を「ただ飲むだけでは酒が美味しくないから、何か作業をして飲むのがいいなあ」という、気軽な感覚で取り組めるのがこの活動のよいところであり、また貝口地区住民の気質や集落の雰囲気にもマッチしたのであろう。

アグリパークとは異なり、貝口ピアパークは面積こそ大きくはないが、山に囲まれ湾に面しており、対馬の風土を感じさせる環境に拓かれている。「浜辺(ビーチ)が近くにあり、農業(アグリ)をし、子供から高齢者まで気軽に寄れる公園(パーク)」が名称の由来である。開墾作業を主とする1年目の活動には、アグリパーク代表の長安六氏や東京の大学生



も参加した。上述のように活動後には公民館で懇親会が開かれ、地域間交流・連携のきっかけとなりうる点で期待がかかる。2年度目となる今年は活動支援の輪を広めることを目指しながら、敷地を拡大し、施設を拡充していく方針としている。

7. 今後の課題

着々と整備が進むとともに活気を増し、派生的効果も得られるようになってきたアグリパーク活動であるが、現時点では地域へ十分に共有された公園になっているとはまだ言えない。今後、地域的な広がりをもたせるにあたって、現地では次のような課題が指摘されている。

第一に、アグリパークへのアクセスの改善の問題がある。アグリパークの用地は山間のやや奥まった場所にあり、近隣の住民でも自動車なしには心理的に足を運びづらい環境にある。イベント時には公民館等の地域拠点からのピストン輸送などで対応できるが、いつでも立ち寄れる場所、行けば誰かがいる場所にすることを目指すうえでは、超小型モビリティ等を活用できるようになるのが望ましい。昨今、技術開発と各地での実証実験が急速に進められている自動運転技術の実装にも期待がかかる。

第二に、アグリパークは子供や高齢者、ひきこもりの方が心を晴らす場となることを目標のひとつとしているため、学校や施設等に働きかけて、団体で車両に乗って訪れる方法もある。ただし、現状ではアグリパークが利用者や管理運営者から共感を得ていたとしても、外に連れ出すことへの管理運営者の不安に対応できていない。すなわち種々の事故のリスクへの対応が第二の課題となっている。

第三に、広報手段の敷居の高さが指摘されている。アグリパークの活動は市報やCATV

などで全島に広報されているお陰で、既に島内遠方の住民にまで広く認知されている。しかしながらこうしたメディアを通して得られる情報は、受け手にとって必ずしも身近な事象として受け止められていないのではないのか。瓦版の配布等、こまめで地道な周知活動が必要と考えられる。

以上のような課題を抱えつつも、アグリパークプロジェクトは緩やかに改善を重ね、地域の無理のないペースで進めていく。他方でアグリパークは当研究所も含め、島外からの来訪者との接点となっており、異なる視点、新しい技術や可能性を語りあう場でもある。引き続き島内外が連携してまちづくりを進めていく予定である。